

JVCKENWOOD

第9期中間期(第2四半期)のご報告

2016.4.1 ▶ 2016.9.30



株式会社 JVCケンウッド

証券コード：6632



代表取締役社長
兼 最高経営責任者 (CEO)

辻 孝夫

当社は9月30日をもって第9期中間期(第2四半期累計期間)を終了いたしましたので、ここにご報告申し上げます。

当累計期間における連結売上高は、前年同期比で約30億円減(2.1%減収)となる1,363億91百万円となり、連結営業利益は、前年同期比で約1億円改善し、8億69百万円の損失となりました。

オートモーティブ分野は、用品(ディーラーオプション)の販売増によりOEM事業が増収となったことなどから増収となり、市販事業において、国内市場でAV一体型カーナビゲーションシステム「彩速ナビ」やドライブレコーダーの販売が好調に推移したこと、海外市場でオーディオ、マルチメディア商品の販売が好調に推移したことなどから大幅に損益が改善し、黒字となりました。

一方、パブリックサービス分野は、無線システム事業および業務用システム事業が減収となったことなどから減収となりましたが、業務用システム事業の損益改善により、ほぼ前年同期並みの損失に留まりました。

また、メディアサービス分野は、コンテンツの販売が好調に推移したエンタテインメント事業が増収、増益となったものの、ビデオカメラの販売が減少したことなどからメディア事業が減収、減益となり、メディアサービス分野全体でも減収、減益となりました。

なお、為替影響を除いた連結売上高は、前年同期比で約6%増となり、為替影響等を除いた連結営業利益は、全分野で損益改善となりました。

Creating value for our customers

—顧客価値創造企業を目指して—

本年は、当社が日本ビクターとケンウッドを合併してから5周年、ケンウッド70周年、来年は日本ビクター90周年を迎える節目の年に当たります。当社は、当社グループが長年培ってきた映像、音響、通信に関する優れた技術やノウハウを、車載関連、あるいはヘルスケアなど今後有望かつ社会的意義のある分野に応用していきます。そして、お客様の課題を先取りし、解決するパートナーとして「尖った」ソリューションを継続的に提供するなど、当社が「強み」を生かせる分野に注力する経営を推進することにより、製品を製造し販売する従来型の「製造販売業」から、お客様の課題を解決するためのソリューションを提供する「顧客価値創造企業」への進化をはかり、今後の飛躍に取り組んでまいります。

今後とも引き続きのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

<オートモーティブ分野>

オートモーティブ分野の 拡大・発展に向けて

当社の成長牽引事業であるオートモーティブ分野は、市販事業とOEM事業で構成され、さらにOEM事業は用品(ディーラーオプション)事業、純正事業で構成されています。

市販事業では、一昨年に初めてドライブレコーダーを投入しました。数千円の価格帯が当たり前の市場で、数万円の当社高性能モデルは瞬く間に売れ筋の上位を占めるようになりました。当社モデルは画像のダイナミックレンジが高く、トンネル出入口などで発生する明暗差による「白とび」や「黒つぶれ」が起きにくいこと、また、車線逸脱や他の車の割り込みがあった場合や、信号が変わっても停車していた場合に警告が出る簡易型の運転支援機能を搭載するなど、高付加価値の商材を提供したことが、お客さまに評価していただいたものと考えています。



用品事業では、市販市場での実績と強み、パートナー企業との連携により、カーナビゲーションやディスプレイオーディオ、ドライブレコーダーなどの新規受注の獲得をはかっています。特に日本市場においては、市販事業で展開している「彩速ナビ」やドライブレコーダーへの高評価により、大手日系自動車メーカーから新規大型案件の受注獲得が進んでいます。

純正事業では、カーエレクトロニクスや音響、映像・光学、センシングなど各種コア技術をグループ内で保有する数少ない専門メーカーであり、このメリットを最大限に発揮し、事業拡大をめざしています。

当社は、英国マクラーレン・オートモーティブ社との協業により、同社高級スポーツカー「McLaren 675LT」に従来のクラスターメーターをフロントガラスに映し出すヘッドアップ・ディスプレイやデジタル・バックミラー、車載用HDカメラなどの基幹技術を搭載したコンセプトカーを完成させ、当社が世界中で高い実績を残しているカーナビゲーションなどのインフォテインメントシステムと融合した、これまでにない革新的運転支援システムの商用化が現実のものとなりました。現在は同車両を用いて、自動車メーカー各社とテストコースにおける実証実験のステップに入っており、実用車への搭載を実現することで、これからの安全・安心・快適な自動車社会への貢献に寄与できると考えています。



連結財務諸表

四半期連結貸借対照表 当第2四半期連結会計期間(平成28年9月30日)

科目	金額(百万円)
資産の部	
流動資産	138,462
現金及び預金	36,902
受取手形及び売掛金	48,097
商品及び製品	25,842
仕掛品	4,899
原材料及び貯蔵品	11,348
繰延税金資産	3,493
その他	8,865
貸倒引当金	△ 985
固定資産	102,078
有形固定資産	49,978
建物及び構築物(純額)	12,347
機械装置及び運搬具(純額)	7,206
工具、器具及び備品(純額)	5,786
土地	22,388
建設仮勘定	2,248
無形固定資産	23,489
のれん	7,318
ソフトウェア	12,165
その他	4,006
投資その他の資産	28,610
投資有価証券	5,737
退職給付に係る資産	15,115
繰延税金資産	5,324
その他	3,031
貸倒引当金	△ 599
資産合計	240,541

四半期連結損益計算書(要旨)

当第2四半期連結累計期間(平成28年4月1日から平成28年9月30日まで)

科目	金額(百万円)
売上高	136,391
売上原価	100,939
売上総利益	35,452
販売費及び一般管理費	36,322
営業損失(△)	△ 869
営業外収益	569
営業外費用	1,424
経常損失(△)	△ 1,725
特別利益	167
特別損失	2,642
税金等調整前四半期純損失(△)	△ 4,200
法人税、住民税及び事業税	1,448
法人税等調整額	△ 37
法人税等合計	1,410
四半期純損失(△)	△ 5,610
非支配株主に帰属する四半期純利益	368
親会社株主に帰属する四半期純損失(△)	△ 5,979

科目	金額(百万円)
負債の部	
流動負債	90,927
支払手形及び買掛金	32,566
短期借入金	9,308
1年内返済予定の長期借入金	8,513
未払金	7,522
未払費用	18,143
未払法人税等	2,116
製品保証引当金	1,117
返品調整引当金	855
受注損失引当金	711
その他	10,072
固定負債	106,120
長期借入金	54,247
再評価に係る繰延税金負債	1,523
繰延税金負債	7,589
退職給付に係る負債	39,639
その他	3,120
負債合計	197,048
純資産の部	
株主資本	73,244
資本金	10,000
資本剰余金	45,272
利益剰余金	18,008
自己株式	△ 36
その他の包括利益累計額	△ 34,710
その他有価証券評価差額金	311
繰延ヘッジ損益	△ 757
土地再評価差額金	3,458
為替換算調整勘定	△ 21,762
退職給付に係る調整累計額	△ 15,960
非支配株主持分	4,959
純資産合計	43,493
負債純資産合計	240,541

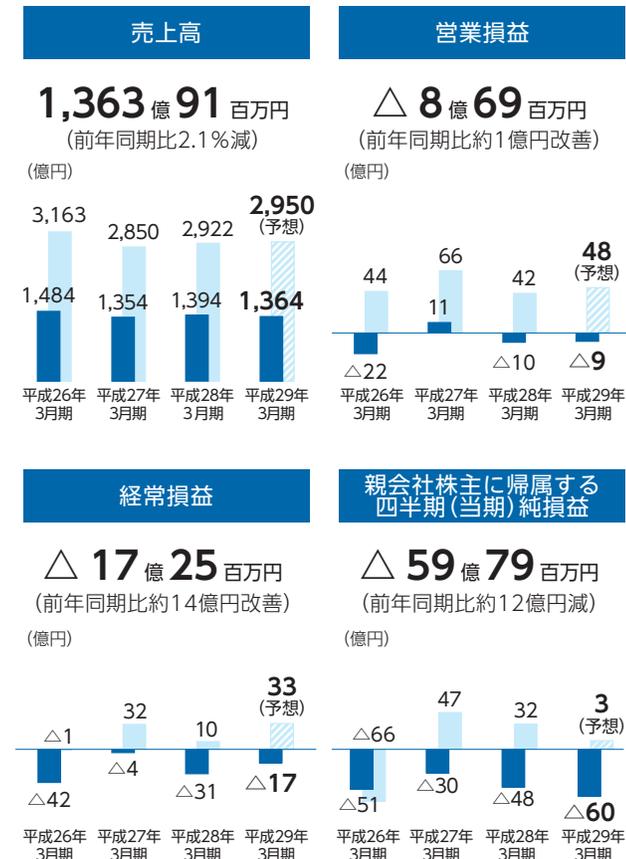
四半期連結キャッシュ・フロー計算書(要旨)

当第2四半期連結累計期間(平成28年4月1日から平成28年9月30日まで)

科目	金額(百万円)
営業活動によるキャッシュ・フロー	4,232
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 8,503
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,097
現金及び現金同等物に係る換算差額	△ 2,661
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△ 5,835
現金及び現金同等物の期首残高	41,551
現金及び現金同等物の四半期末残高	35,716

連結決算ハイライト

■第2四半期(累計) / □通期



損益為替レート

		第1四半期	第2四半期
当期	米ドル	約108円	約102円
	ユーロ	約122円	約114円
前期(参考)	米ドル	約121円	約122円
	ユーロ	約134円	約136円

中間配当について

当社では、安定的に利益還元を行うこと、また、今後の成長に向けた経営資源を確保することが経営上の最重要課題の一つと考え、収益力および財務状況を総合的に考慮して剰余金の配当およびその他処分などを決定することとしています。

第9期中間配当につきましては、経営資源を集中するため、平成28年10月31日開催の取締役会で配当を見送ることを決議いたしました。

経営体制

取締役

社外取締役 取締役会議長	阿部	康行
代表取締役社長	辻	孝夫
代表取締役	江口	祥一郎
代表取締役	相神	一裕
代表取締役	田村	誠一
取締役	谷田	泰幸
社外取締役	疋田	純一
社外取締役	吉海	正憲
取締役 相談役	河原	春郎

監査役

常勤監査役	坂本	隆義
社外監査役	浅井	彰二郎
社外監査役	大山	永昭

執行役員 ※(兼)は取締役との兼務です。

(兼)執行役員 最高経営責任者(CEO)	辻	孝夫
(兼)執行役員 副社長		
兼 オートモーティブ分野 最高執行責任者(COO)		
兼 EMEA総支配人	江口	祥一郎
※EMEA:ヨーロッパ、中東、アフリカ		
(兼)執行役員 副社長		
兼 パブリックサービス分野 最高執行責任者(COO)		
兼 米州総支配人	相神	一裕
(兼)執行役員 副社長		
兼 最高戦略責任者(CSO)		
兼 メディアサービス分野 最高執行責任者(COO)		
兼 企業戦略統括部長	田村	誠一
執行役員 副社長		
兼 株式会社JVCケンウッド・ピクチャーエンタテインメント代表取締役社長	斉藤	正明
執行役員 専務 最高総務責任者(CAO)		
兼 企業管理統括部長	今井	正樹
執行役員 専務 最高財務責任者(CFO)	藤田	聡
(兼)執行役員 常務 最高技術責任者(CTO)		
兼 技術・生産戦略統括部長	谷田	泰幸
執行役員 常務 中国総代表		
兼 JVC (China) Investment Co., Ltd. 董事長		
兼 JVCKENWOOD Hong Kong Ltd. 取締役会長		
兼 Shinwa International Holdings Limited 董事長	上山	博民
執行役員 常務 アジア・オセアニア総支配人	大井	一樹
執行役員 常務 財務経理統括部長	宮本	昌俊
執行役員 常務 米州総支配人補佐 PS統括	鈴木	昭
執行役員 常務 オートモーティブ分野 OEM事業部長		
兼 同事業部 純正事業統括部長	飯塚	和彦
執行役員 常務 SCM統括部長		
兼 同部 本社調達部長	恩田	茂也
執行役員 常務 オートモーティブ分野 市販事業部長	新井	卓也

お問い合わせ先

株式会社JVCケンウッド
企業コミュニケーション統括部 広報・IR・SR部
住所: 〒221-0022
神奈川県横浜市神奈川区守屋町三丁目12番地
電話: 045-444-5232 (直通)
Eメール: priir@jvckenwood.com
ウェブサイト: <http://www.jvckenwood.com>



(ウェブサイトはこちら)

<p>2013 東特長岡株式会社を全株社を承継</p> <p>TOTOKU</p>	<p>2014 北米デジタル無線規格P25を手掛ける無線事業会社「EFJohnson Technologies, Inc.」を子会社化</p> <p>EFJohnson</p>	<p>ハイレゾ対応のウッドコーンオーディオシステム発売</p>	<p>2015 ASK Automotive Industries Group イタリアの車載用部品事業会社「ASK Industries S.p.A.」を子会社化</p>	<p>F1.2の光学12倍ズームレンズを搭載した小型軽量の業務用4Kメモリーカードカメラレコーダー発売</p>	<p>業界初、高音質ハイレゾ音源対応「彩速ナビ」プレミアムモデル発売</p>	<p>2016 ヘッドアップディスプレイによるデジタルコックピットシステムを搭載したマクラーレン「McLaren675LT」を「2016 International CES」で展示。</p>
<p>香港の車載AV機器用のCD/DVDメカニズム製造・販売最大手「Shinwa International Holdings Limited」を子会社化</p> <p>shinwa</p>	<p>アマチュア無線機「最高級実戦機」HF/50MHz [TS-990]発売</p>	<p>世界初の量産型8K業務用「D-ILA」プロジェクター発売</p>	<p>2012 米国CMOSイメージセンサー設計・開発会社「Alta Sens, Inc.」を子会社化</p> <p>ALTASENS</p>	<p>ヘッドアップディスプレイ第一世代機の開発を完了</p>	<p>放送局品質のライブストリーミング機能搭載HDメモリーカードカメラレコーダー発売</p>	<p>2011 JVCケンウッド・ホールディングスが日本ビクターとケンウッドを吸収合併し、株式会社JVCケンウッドに商号変更</p> <p>JVC KENWOOD creates excitement & peace of mind</p>
<p>2007 米国無線通信システム事業会社「Zetron, Inc.」を子会社化</p> <p>ZETRON</p>	<p>2008 日本ビクターとケンウッドが株式移転により共同持株会社「JVC・ケンウッド・ホールディングス株式会社」を設立</p> <p>JVC KENWOOD HOLDINGS</p>	<p>2009 ケンウッドと日本ビクターの初の技術融合による、AVメモリーナビゲーションシステム発売</p>	<p>世界最小・最軽量のハイビジョンハードディスクムービー「Everio」発売</p>	<p>2010 2D映像を3D立体映像に自動変換業務用3Dイメージプロセッサ発売</p>	<p>HDカメラ用次世代ハイスピード・プロセッサ(LSI)を開発</p>	<p>初代「彩速ナビ」発売</p> <p>1920フルハイビジョンで記録できる3Dハイビジョンムービー「Everio」発売</p>
<p>独自開発したデジタル業務用無線機「NEXEDGE」シリーズを北米で発売</p>	<p>2006 VHSビデオが「IEEEマイルストーン」に認定</p>	<p>2005 世界初1.1インチ小型ハードディスク採用のコンパクトムービー「Everio」発売</p>	<p>デジタル無線通信機の技術仕様標準化の共同研究に関してアイコム株式会社と資本・技術提携を締結</p>	<p>2004 新開発の高画質映像技術「映像知能」[GENESSA]搭載地上・BS・110度CSデジタルハイビジョン液晶テレビ発売</p>	<p>2003 ウッドコーン・スピーカー搭載コンパクトコンポーネントシステム発売</p>	<p>1997 スバル「フォレスタ」、2代目「レガシイ」にリアルフォーカスサウンドシステムを供給しOEM事業基盤を確立</p> <p>1995 世界初ポケットサイズデジタルムービー「GR-DV1」発売</p>
<p>1976 家庭用VHSビデオカセット第1号機「HR-3300」発売</p>	<p>1978 日本で業務用無線機器分野に参入</p>	<p>1980 米国でカーオーディオ分野に参入</p>	<p>1983 米国で業務用無線機器分野に本格参入</p>	<p>1984 カメラ一体型VHSビデオムービー第1号機「GR-C1」発売</p>	<p>1986 トリオが株式会社ケンウッドに商号変更</p> <p>KENWOOD</p>	<p>1991 マクラーレンF-1チームとオフィシャルサプライヤー契約を締結し、無線システムの供給を開始</p> <p>業界初16:9マルチワイドビジョン発売</p> <p>1992 業界初の1DINサイズGPSカーナビゲーション発売</p>
<p>1972 ビクター音楽産業株式会社(現 株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント)設立</p> <p>VICTOR ENTERTAINMENT</p>	<p>1966 業界で初めて音響製品を完全トランジスタ化</p>	<p>1963 世界最小2ヘッド業務用VTR発売</p>	<p>1962 業界初のトランジスタアンプを発売</p>	<p>1960 有限会社春日無線電気商会がトリオ株式会社に改組</p> <p>TRIO</p>	<p>1957 日本メーカーとして初めてFMチューナーの輸出を開始</p>	<p>1946 有限会社春日無線電気商会設立</p> <p>1939 日本初のテレビジョン受像機完成</p> <p>1927 日本ビクター蓄音機株式会社設立</p> <p>"HIS MASTER'S VOICE"</p>

<パブリックサービス分野>

社会性発達評価装置 Gazefinderの開発



(動画を見る)

これまでに培った映像技術、光学技術を活かし、当社独自の視線計測技術により、被験者がモニターに提示される画像のどこを見ていたのか視線の可視化を実現します。頭部の固定やゴーグルの装着を必要とせず、モニター上の画像を目視するだけで、幅広い年齢の被験者に対し、身体や心理面への影響を最小限に抑えながら軌跡計測が可能です。また「大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学 連合小児発達学研究所」と協同して、社会性発達評価装置「Gazefinder」の開発を行っています。本装置は、評価用映像に対する注視点を測定することにより短時間に子どもの「社会性の発達」を調べることをめざしています。このことを応用して、自閉スペクトラム症の早期発見に援用することも可能です。



<パブリックサービス分野>

インテリジェント セキュリティシステム



(詳細はこちら)

本システムは、監視カメラで撮影したリアルタイム映像および記録媒体に保存した記録映像に対して、IVA(インテリジェント・ビデオ・アナリティクス)技術で画像解析することにより、特定の色や大きさ、人物、車両などを抽出し、異常が発生した場合には業務用無線機器などを通じて即座に警備員へ伝達できます。これにより、システムの規模に合わせた犯罪の抑止から、徘徊人の検出、泥酔者のホームからの転落防止など、幅広いニーズに対応する監視システムを提供することが可能となります。また、来場者や通行者の人数カウントや動線の可視化によりマーケティングに活用することも可能です。



<メディアサービス分野>

クラウドファンディングサービスを 活用した製品開発

当社はJVCブランドより、「周囲音取り込み機能」を搭載した「マルチライブモニターイヤホン」の市場導入に際して、株式会社サイバーエージェント・クラウドファンディングが運営するクラウドファンディングサービス「Makuake(マクアケ)」を利用した開発支援プロジェクトを実施いたしました。本機は、本体にマイクを内蔵することでスマートフォンの音楽を聴きながら周囲の音をモニターできる、Bluetooth® 搭載のインナーイヤーヘッドホンです。好きな楽曲を聴きながら、自分の演奏する楽器の音を取り込んでミックスし、アーティストとセッションしているかのようなパッチャル体験ができます。また、電車のアナウンスや、環境音、会話などの周囲の情報を取り込むことができるため、電車の乗り過ごしを防止したり、音楽を聴きながら人と会話するといったコミュニケーションも可能にします。本コンセプトはユーザー様から圧倒的な支持を得て、支援目標金額100万円に対し2,251万円の資金を募ることができ、2018年1月より製品のお届けを予定しています。



<メディアサービス分野>

エンタテインメント事業の 主なニューリリース作品



SMAP
アルバム [SMAP 25 YEARS]



桑田 佳祐
シングル「君への手紙」



星野 源
シングル「恋」



Dragon Ash
シングル「光りの街」



サカナクション
シングル「多分、風。」



木村 カエラ
アルバム [PUNKY]



この冊子は環境保全のため、植物油インキとFSC® 認証紙を使用しています。
また、見やすく読みがちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。